

□ O. POLUNIN & A. STANTON: *Flowers of the Himalaya* 30+580 pp. 1984. Oxford University Press, Dehli. 350ルビー. ヒマラヤ植物相は戦後における研究によって、それまでの断片的知識の段階から、いっきに植物相の概要を掌握しおえた段階にまで高まった。その成果の集大成のひとつが原教授と Williams らによる “An enumeration of the flowering plants of Nepal” であり、他のひとつが本書の完成だといっても過言ではない。すでに, Stanton には *Forest of Nepal* (1972) の著作があり、それには実地にネパールを調査し、今日のヒマラヤ植物研究に多大の貢献をした氏の経験の重さが感じられた。本書は著者のひとり Polunin が著わした *Flowers of Europe* (1969) に似た体裁をとっており、128ページに690以上のカラー写真、74ページに315種の線画が収録され、443ページにわたって科ごとに属の検索表と種の特徴がまとめられている。写真として収められた植物は恐らく同時に採集され、多くの専門家の研究を助けたものであろう。その成果が同定の正しさに反映しているのはいうまでもない。ただ残念なことは、カラー写真の色調、造本がいまひとつさえないことである。インドで製版、印刷、製本されたことによるが、せめてカラー写真の製版、印刷だけでも欧米か日本でやって欲しかった。さらに欲をいえばきりがないが、サクラソウ属、ユキノシタ属、シオガマギク属などヒマラヤで特に多様化した属についてはもっと多くの種の写真が収録されていてもよかったと思う。最近ではモンスーン期でもネパール・ヒマラヤへの旅行は容易になった。これまでこの地域のすぐれた植物図鑑やガイドブックがなかったので、本書は専門家のみならず多くの愛好者に格好の贈り物となるであろう。(大場秀章)

□中国科学院 中国植物誌編集委員会編：中国植物誌 (*Flora Reipublicae Popularis Sinicae*) 34(1分冊)：242 pp. 1984. 科学出版社、北京. 4.10元. この巻はモクセイソウ科、ワサビノキ科などを扱っているが、本文の86%はベンケイソウ科の記述に充てられている。中国は同科マンネングサ亜科が最も多様化した地域のひとつであり、中国の研究者によるこの亜科の記述が注目されていた。マンネングサ属 *Oreades* 節を傅坤俊が分担したほかは、この科の研究者として著名な傅書遐が執筆している。全体で7属207種、その他26種が疑問種として扱われている。これまでに記載された種の数には700以上に達するので、その異同を明らかにするだけでも大変であったと思われる。分類体系は Ohba (1978) に準拠しているが、節、列の区分は異なる。各種の扱いについてはヒマラヤ、ビルマ産種などについての最近の研究成果が随所に取り入れられている。マンネングサ属 *Oreades* 節を除くと、中国のものだけを分類したという段階は越えていると言える。7の新組み合わせがあるが、新種の発表はない。標本を検討し得なかった種を‘存疑種’としているのは見識の高さを示すものだろう。日本のフロラとの関連で注目されるのは、日本における自生地がはっきりしないミセバヤの中国発見(湖北省利川)であろう。本書の完成によって、今後は特に中国に分布の中心があるテンジクイワレンゲ属やムラサキベンケイソウ属の詳細な研究が俟たれる。(大場秀章)